

第 16 回(2013.07.27 配信)

篠井純四郎の日本史講座－「間違えやすい日本の古い時代の話」

歌仙と六歌仙

六歌仙という言葉を知っている人は多いのですが、だれがメンバーかというによく覚えていない人がほとんどです。歌仙と六歌仙とは、厳密には違う人を指します。奈良時代から平安時代にかけて「歌仙」と呼ばれた歌人がいました。柿本人麻呂(かきのもとのおとまり)と山部赤人(やまべのあかひと)ですが、遙か後世になって『古今和歌集』に登場する在原業平(ありわらのなりひら)、僧正遍昭(そうじょうへんじょう)、小野小町(おののこまち)、文屋康秀(ふんやのやすひで)、喜撰法師(きせんほうし)、大伴黒主(おおともおくろぬし)の 6 人を「歌仙」に対して「六歌仙」と呼んだのです。

平安貴族は女性を口説いたりちょっかいを出したりする手段として和歌を詠んで贈ったといいますが、当時「歌仙」と称された柿本人麻呂(生没年不詳)や山部赤人(生没年不詳)の他にも源融(みなもとのとおる=822~895)とか小野篁(おののたかむら=802~852)など優秀な歌人は数多くいました。

柿本人麻呂については歴史書にあまり記載が無く、その生涯は謎ですが高い身分にあったことは間違いないようです。『万葉集』には長歌、短歌合わせて 100 首近くあり、歌人として名を残した人です。草壁皇子(くさかべのみこ=天武天皇と持統天皇の間に生まれた皇子)に仕えて、石見の国(島根県)に役人として下って亡くなったといわれています。また、山部赤人は柿本人麻呂と同様に史書にあまり記載が無く、『万葉集』には 50 首近い歌が詠まれています、あまり高い位の人ではなかったようです。

「六歌仙」では、在原業平は桓武天皇の孫に当たり、『伊勢物語』の主人公だともいわれていますが、人並みすぐれた歌才を持っており、眉目秀麗な自由気儘で色好みの美男子だったようです。僧正遍昭は、桓武天皇の孫であり、俗名は良岑宗貞(よしみねのむねさだ)で、良少将(りょうのしょうしょう)と呼ばれましたが、寵愛された仁明天皇が崩御したため出家しました。小野小町と恋仲だったともいわれています。妻にも告げずに家を出て、諸国のお寺を巡って旅をしているときに、妻が自分の無事を願って祈っているところに出会い、会いたいのをこらえ人知れず立ち去ったという逸話があります。

文屋康秀も位はあまり高くないので、歴史書にはほとんど登場しないから、その生涯はよく知られていません。二条の後(藤原高子)に出入りしていたとか、小野小町と親しかったとかいう話が残っています。地方に下るにあたり、小野小町を口説いたが振られたという話もあります。喜撰法師は宇治山に庵をむすんだ人という以外、全く記録に登場しない伝説的な人です。大伴黒主もまた伝説的な人で、本当は大友黒主というのが正しいようです。そこから大友皇子(天智天皇の子)の血筋ではないかといわれていますが定かではありません。

小野小町は絶世の美女として有名で、そのために言い寄ってくる男は数知れず、だったようですが、誰にもなびかなかったことから、穴(臆)の無い女と噂されたという伝説があります。そこから穴のない針のことを「小町針」と呼んだので、現在の「まち針」になったといわれています。生誕地を名乗る町村が幾つかあって特定できていません。秋田県がいち早く湯沢市小野が出身地だとして、米に「あきたこまち」の名前をつけ、おかげで新幹線の愛称が「こまち」と付けられたりして一歩リードしています。何でもそうですが、先に声を大にして叫んだ方が勝ちですね。

三筆と三蹟

この言葉も覚えている人が少ないようです。言われてみれば「ああ、あの人がそうだったか」というような言葉です。平安初期、弘法大師空海、嵯峨天皇、橘逸勢(たちばなのはやなり)が能書家として知られていましたが、その三人を「三筆(さんひつ)」と呼びました。また、平安中期には小野道風(おのみちかぜ)、藤原行成(ふじわらのいくなり)、藤原佐理(ふじわらのすけまさ)が名筆家として知られていましたが、その三人を三蹟(三跡、さんせき)と呼んだのです。

三筆の一人である弘法大師空海(774~835)は、俗名は佐伯真魚(さえきまお)で、20歳ころから出家し、延暦23年(804)遣唐使の留学僧として唐に渡り、帰国して真言宗を開きました。「弘法は筆を選ばず」とか「弘法も筆の誤り」という諺もあるほど字の上手な人でした。承和2年(835)、生きながら埋められて即身仏となりました。延喜2年(835)、醍醐天皇は空海に「弘法大師」の諡号(しごう)を贈りました。ちなみに大師といえば空海を指しますが、これまで大師は27名もいます。「黄門さま」といえば水戸光圀ですが、官職の中納言を別名で黄門と呼んだから水戸光圀だけが黄門さまではないのと同じです。また『西遊記』でおなじみの「三蔵法師」も名前ではありません。仏教の経蔵・律蔵・論蔵という三つの教えに精通した人を指す言葉であって、「玄奘」が名前です。

空海は仏教を広めただけでなく、讃岐うどんや灸を伝えたといわれていますが、そのほかにも非常に多くの伝説を残しており、各地に弘法大師によって発見されたという泉や温泉が数え切れないほどあります。また、「護摩の灰」という言葉がありますが、弘法大師が焚いた護摩の灰と偽って売りつける旅の詐欺師がおり、このことから旅人の懐を狙う盗人を指す言葉になったのです。変わったところでは、弘法大師は日本における男色の開祖でもあるとされています。

嵯峨天皇(第52代天皇、在位809~823)は、宮廷文化の盛んな時期を過ごして名筆の一人にあげられていますが、浪費が激しく財政を逼迫させるなど、あまり評判がよくありません。56年の生涯を通じて50人もの子供をつくったといわれていることの方が有名です。

橘逸勢(782~842)は遣唐使として唐に渡りました。書に秀でていましたが、842年の皇太子を東国に移す画策(承和の変)に関連して逮捕され、伊豆に流罪される途中亡くなりました。後に名誉は回復されましたが、逸勢の逸話はあまり後世に伝わっていません。

三蹟(三跡)の一人、小野道風(894~966)は小野妹子の子孫です。あるとき、カエルが垂れ下がった柳の枝に飛びつこうとして何度も挑戦して失敗していたが、ようやく枝に飛び移ることが出来た光景を目にして、一念発起し書道に専念したという逸話が残っています。この話は戦前の教科書にも載った有名な話ですが、現在でも花札の絵柄になっていますから目にしている人も多いでしょう。

藤原行成(942~1028)は、世の中に面白いことなど全くないような顔をしていて、大変つき合い難いと評判もよくありませんでしたが、一条天皇や中宮彰子あるいは藤原道長や清少納言など、行成をよく知る人の評判はいいから、人見知りする性格だったのかもしれませんが。

最後には正二位権大納言に出世しました。当時は藤原道長の全盛期で藤原公任(ふじわらのきんとう)、藤原齊信(ふじわらのただのぶ)、源俊賢(みなもとのとしたか)と並んで、「四納言」と呼ばれた平安貴族を代表する人でもありました。

藤原佐理(944~998)は、藤原鎌足から12代の子孫で、祖父が太政大臣藤原実頼という名門の生まれでしたが、最後は正三位どまりで名門の出としてはそれほど出世してはいません。ふだんから酒の上での失敗が多く、仕事ぶりも芳しくなく、「職務怠慢」な人と評されていたようです。伊予国(愛媛)権守(ごんのかみ=長官)の時にも、上がってきた文書の決裁もせずほったらかしていたとか、正月の儀式をサボって始末書を書かされたなど、数多くの逸話が残っています。

評判の悪い都を抜け出す手段として、九州の太宰大貳(だざいだいごに=太宰府の次官)を願い出て許されています。太宰大貳は、次官ですが長官は常駐しなかったため、実質の長官で、非常に権力がありました。この時も、都を出るときに関白藤原道隆に挨拶してくるのを忘れて、甥の藤原誠信(ふじわらのさねのぶ)に取りなしを頼んでいます。これが『離洛帖(りらくちょう)』と呼ばれ、現在国宝に指定されている文書です。

また、太宰府の下級役人と宇佐八幡宮の下級役人とが争う事件があって、この責任を問われて都に召還されました。これも佐理が美味しい魚を食べ酒ばかり飲んでいて、職務を怠ったからでしょうが、それでも都に帰った佐理は正三位に叙せられたから、結構世渡りが上手な男だったに違いありません。

(篠井純四郎)